特別展関連

地球ミュージアム紀行

トロッペン博物館／オランダ

文化の接触と交流の殿堂

吉田 憲司（よしだ けんじ）
本館文化資源研究センター

現在開催中の特別展「アジアとヨーロッパの肖像」に向けての展示物の借用で、ひとつの館としてもっとも多くの資料・作品を提供していただいたのが、オランダ・アムステルダムのトロッペン博物館である。

トロッペン博物館は、一八七一年、オランダのハーレムに設けられた植民地博物館をその前身としている。植民地博物館は、当時、オランダ通商産業振興協会の理事長を務めていたフレデリク・ウィレム・ファン・エーデンが、自ら収集していた海外の産物のコレクションをもとに設立したもので、オランダの海外領土からもたらされる産物を展示し、それを素材として国内と海外領土における通商と産業の振興のための調査・研究を推進することを目的としていた。

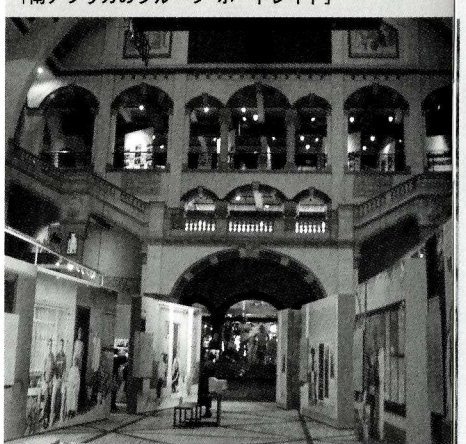
植民地博物館は、一八八一年からは政府の資金援助も受けるようになり、収蔵品の量も活動の範囲も拡大を続けていく。その活動を基礎に、一九一一年には植民地研究所が設立され、博物館はその一部として再編された。そして、一九二六年、植民地研究所と博物館は、アムステルダムにあらたに建設された現在の建物に移転する。その後、インドネシアの独立（一九四八年）を受けて、一九五〇年に研究所は王立トロッペン研究所（熱帯研究所の意）と名称を変え、博物館もトロッペン博物館と改称して現在に至る。この段階で、博物館の収集と研究の対象も、広く熱帯をあつかうものとなり、アジアやアフリカ、南アメリカ、オセアニアの民族誌コレクションが形成されていくことになる。

トロッペン博物館は、展示の面でも、先進的な試みを進めてきた。一九七九年の全面改装に当たっては、「現代世界における開発の問題」を中心テーマに据え、世界各地の現代的状況を示す展示を全面的に展開した。当時、世界の民族学博物館の展示が、いずれも諸民族の伝統的な生活を紹介するものにとどまっていたなかで、その試みは衝撃をもって迎えられた。一方、二〇〇〇年以降、順次進められている改修では、一転して、歴史に重点を置き、「オランダ領東インド―植民地の歴史」の常設ギャラリーを設けるとともに、各地域別のギャラリーでも、歴史的資料を活用しつつ、現代までの変化を跡づける展示を展開している。現代性の強調や歴史性の回復。いずれも一九七〇年代以降の民族学・文化人類学の動向を、いち早く民族誌展示に反映した動きである。

トロッペン博物館が、世界に先駆けて展開したもうひとつの事業が、子ども博物館の開設である。六歳から一二歳の子どもだけを対象としたもので、ひとつのプログラムは、二年間の準備ののち、三年間継続して実施される。いずれも「異文化体験」をテーマとしており、現在は、「ボンベイ・スター」という、インド・ボンベイ（ムンバイ）を舞台に、専属のスタッフとともに子どもたちが都市の仕事や生活を追体験する参加型のプログラムが実施されている。

トロッペン博物館の民族誌コレクションには、伝統的な生活用具だけでなく、文化の交流の跡を示す作品や資料が数多く含まれている。コレクション、事業、展示のいずれもが、異文化交流に焦点を当てたものになっているところに、トロッペン博物館の特徴がある。それは、この博物館がたどった歴史そのものが、まさに文化の接触と交流の歴史であったことに由来している。

トロッペン博物館外観（2007年）


トロッペン博物館１階広間。
2003年の企画展
「南アフリカのグループ・ポートレイト」